



(国) 際化の掛け
声も高らかに
今日この頃で、誠
に結構である。医療
の分野も例外ではな
く、国際化に対応し

ようござさまさまな意見がとび出している。この中には残念ながらあまり賛成できないものもある。たとえば外国人専門の国際病院を東京などにつくろうという動きもその一つである。

(第) 一に外国人との間に高い垣根があるという日本に外国人専門の病院を建設するのは、お互いの社会をさらに離れさせることとはあっても交流させることではない。特殊な世界を作るだけのことである。どうしたら外国人と日本人の患者が差別なく同じ病院で受け入れられるかという思考が大切なのだ。

第二に東京に一か所、このような病院ができて、遠方からの患者が毎日通院できるわけもない。日本人もより近くの医療機関を探すが、外国人も同様なのである。地域の医療機関が外国人をも受け入れていくのが自然であり、これを応援するようなシステムが必要とされているのではないか？

(第) 三に日本には現在、観光ビザや不法滞在の人も含め、約三百万人の外国人が生活しているとみられている。

る。その多くは東京など大都市に集中しており、たった一か所の病院で対応するのは不可能に近い。

第四に外国人をめぐる医療問題で、とりわけ医療機関で問題となっているのは国民健康保険、社会保険に加入資格のない人々の高額医療費の未納である。これらの人々が外国人専門病院で受け入れてもらえるとは到底思えないし、現行のまま受け入れれば経営は悪化の一途だろ

(私) は開業以来二年で三十二か国延べ二千二百三十六人の外国人を診察した。患者総数の約一五%にあたる。また昨年四月、六

外国人医療に感あり

幸 米 林 小

人の会員の寄付金を基に開設したAMD A国際医療情報センターには毎月約百件の外国人からの電話医事相談がある。多くの人はわれわれ同様地域で受け入れられることを望んでいる。

(言) 語はいうまでもないが、彼らが懸命に探しているのは彼らの風

俗・習慣に理解を示し、共に考え、相談相手ともなる医師や看護婦である。言葉を変えればインフォームド・コンセントを実践している人である。外国人への法的整備は当然として、良いソフトの育成が急務である。

(小林国際クリニック院長、AMD A国際医療情報センター所長)